

志賀公園遺跡の初期須恵器

● 早野浩二

本論においては、志賀公園遺跡の初期須恵器に対する評価を改めて整理した。その結果、正木町遺跡・伊勢山中学校遺跡の初期須恵器を含めた時期、系譜にかかる位置に議論の余地が多いことが判明した。また、円窓付壺（脚付壺）を比較検討し、その製作系譜の一端を示した。

はじめに

名古屋市北区志賀公園遺跡においては、良質な古墳時代中期の土器群が検出されている（財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター 2001『志賀公園遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第90集）。土器群には初期須恵器も多く含まれ、それらは調査報告書の刊行後、伊藤禎樹（伊藤 2004、以下、伊藤論文）、中里信之（中里 2014・2015・2017、以下、中里論文）によって詳細な検討が加えられている。筆者は、同遺跡出土の古墳時代中期の土器の報告に携わった経緯もあることから、これらの論文に対する見解を述べるとともに、報告書刊行後の幾つかの知見を加えることで、多少なりとも今後の議論の進展に寄与することとしたい。

さて、既報告の遺物図版は、印刷が良質ではなく、校正でも十分に修正が行き届かなかった。そこで、今回、出土した初期須恵器の大部分を愛知県埋蔵文化財センターが保管する原図から改めてトレースした実測図を再提示した（図1～5）。なお、器種分類については報告書のそれを一部修正（後述）して再掲し（図6）、遺物番号は報告書の番号を踏襲した。

1. 伊藤論文と中里論文について

伊藤論文（伊藤 2004）は、志賀公園遺跡の報告を受け、岩崎直也が提唱した「尾張型須恵器」の特性（岩崎 1987）をより体系的に把握し、その成立、展開過程を整理した意欲的な論考

である。その論考は、縦線文が「TG231・232 型式並行（伊藤による尾張型須恵器第1段階）」の名古屋台地出土の須恵器に多用されていること、文様帯を区画する2本1単位の平行沈線（二子線）が「尾張独特の手法」でTG231・232 型式併行段階から存在すること、尾張南部の初期須恵器に陶邑よりも北摂から北河内、南山城との類似性が認められること等、重要な指摘も多く、結論として、「韓式系軟質土器」の出土も踏まえて、「TG231・232 型式並行」（尾張型須恵器第1段階）は尾張における須恵器生産が「正木町遺跡かその周辺で開始された可能性が高く」、「TK73 型式並行（尾張型須恵器第2段階）」には「尾張型須恵器」の基本器種が整い、「TK216 型式並行（尾張型須恵器第3段階）」には畿内の要素も摂取しつつ、東山丘陵における須恵器生産が確立したことを述べている。なお、伊藤はTK73 型式併行段階の生産拠点はなお名古屋台地にあつて、TK216 型式併行段階については、名古屋台地と東山丘陵に、志賀公園遺跡に須恵器を供給した生産拠点を含めた複数の生産拠点を想定している。

名古屋市中区正木町遺跡・伊勢山中学校遺跡において出土する須恵器の一群に、東山111号窯の須恵器に（様式的、型式的に）先行する様相が認められることはしばしば指摘され、概ねそれは共通の理解ともなっている感がある（斎藤 1984、尾野 1997、城ヶ谷 2007 等）。その場合、東山111号窯に先行する未知の生産窯が猿投窯に存在し、名古屋台地を中心とする消費地に須恵器を供給した図式が想定されることが多かった。なお、この想定については、胎土や形態の類似が根拠とされることが多い。対

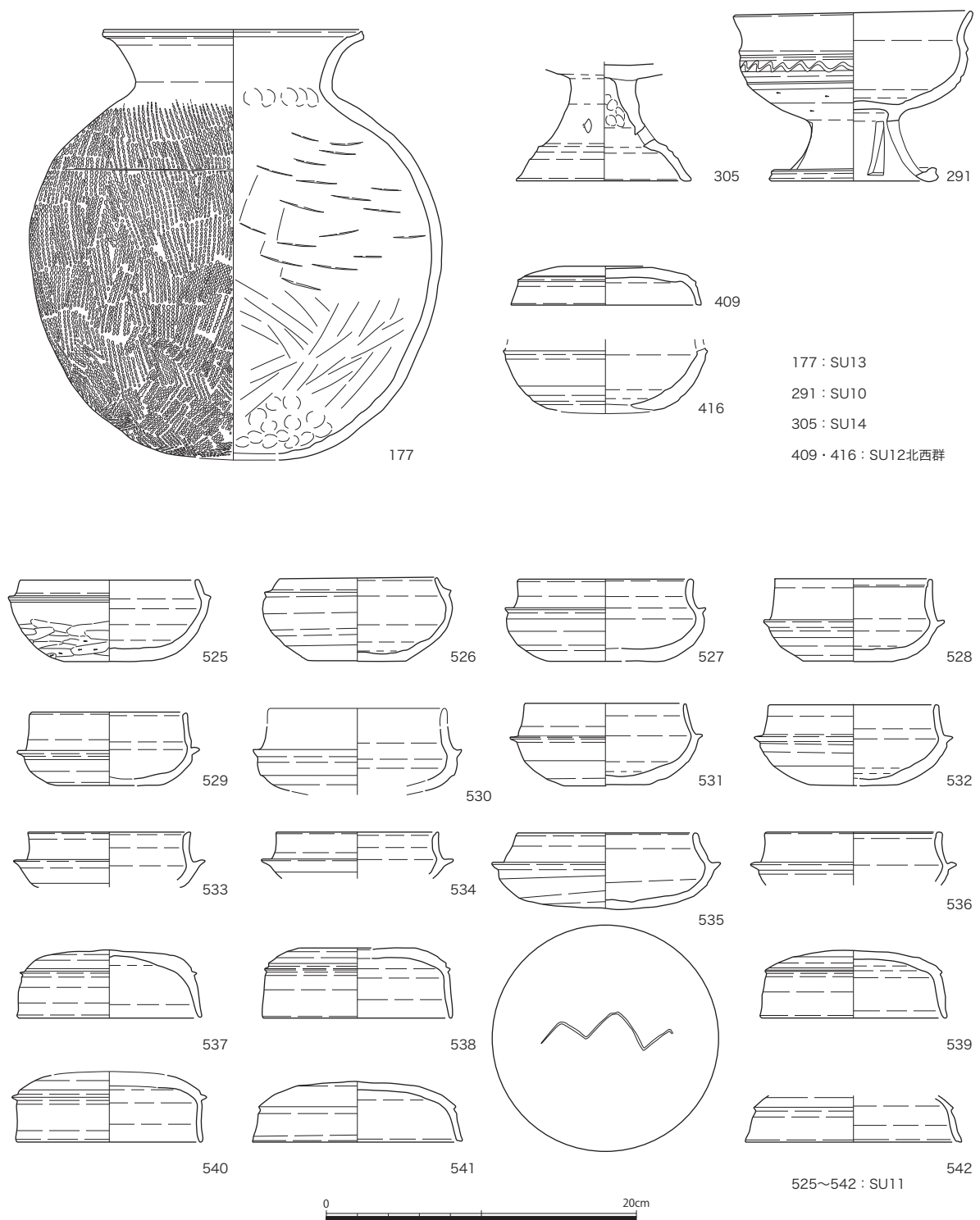


図1 志賀公園遺跡出土初期須恵器(1)*

* 530、536については、(復元)最大径、(復元)口径を再計測し、実測図を修正した。

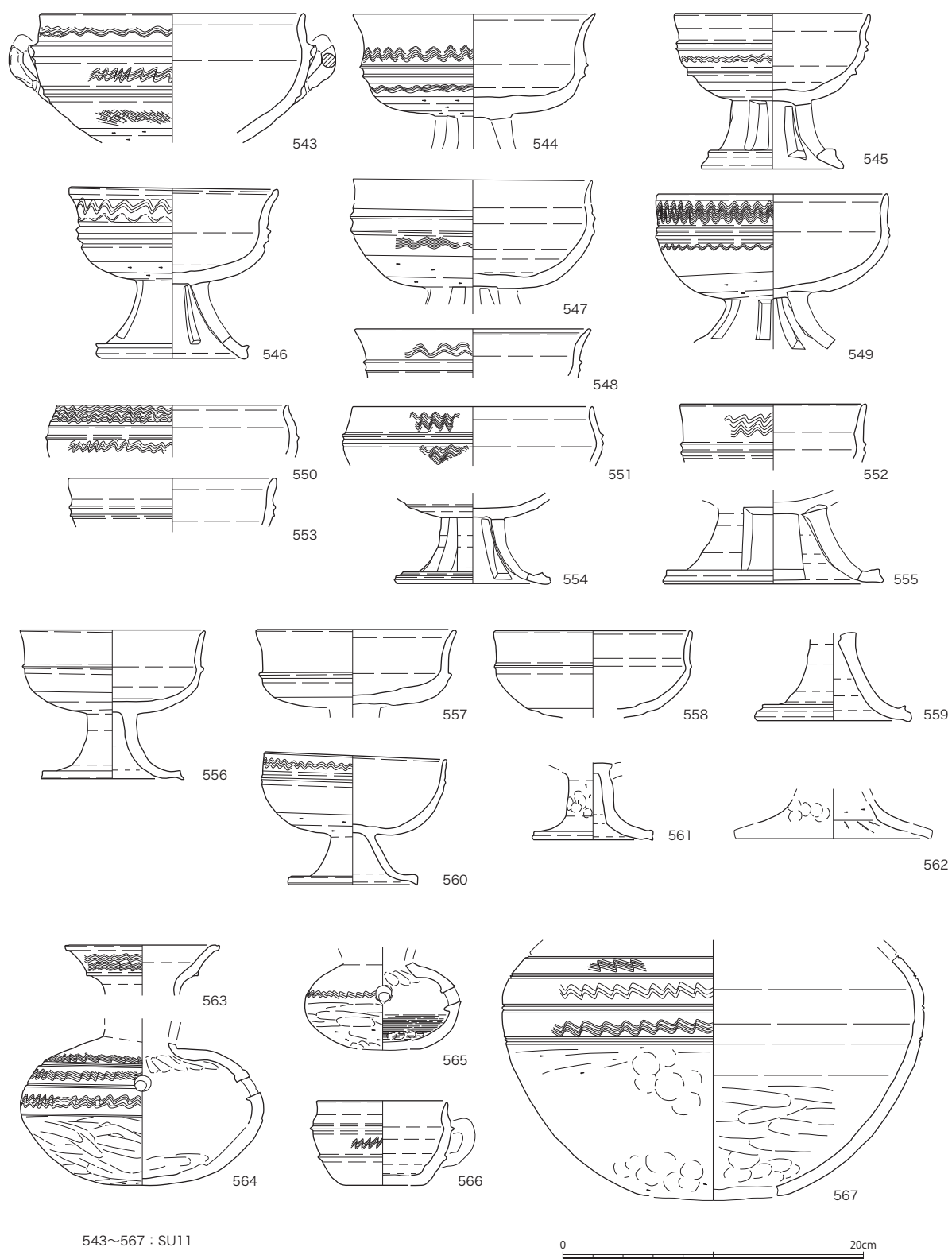


図2 志賀公園遺跡出土初期須恵器（2）

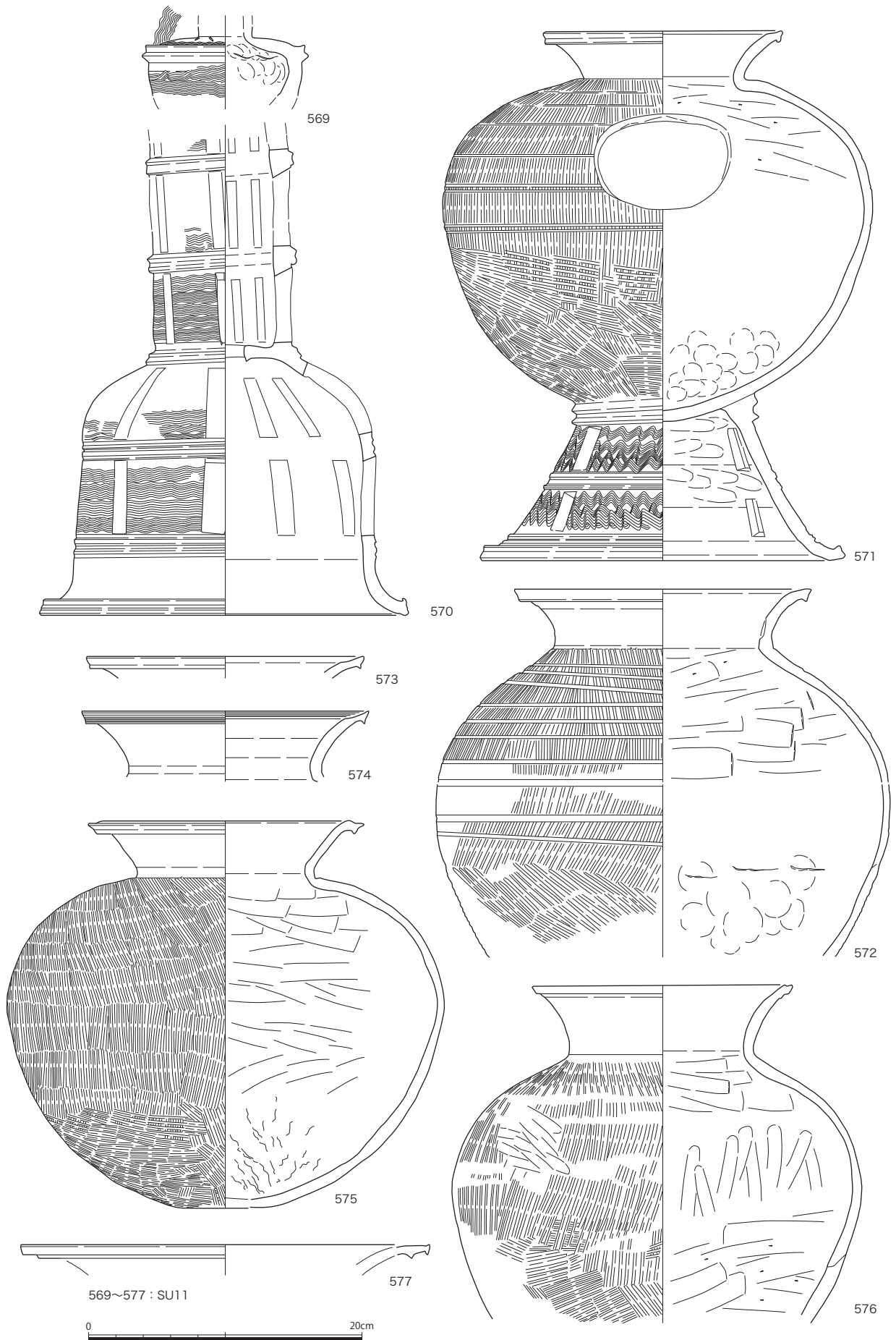


図3 志賀公園遺跡出土初期須恵器（3）

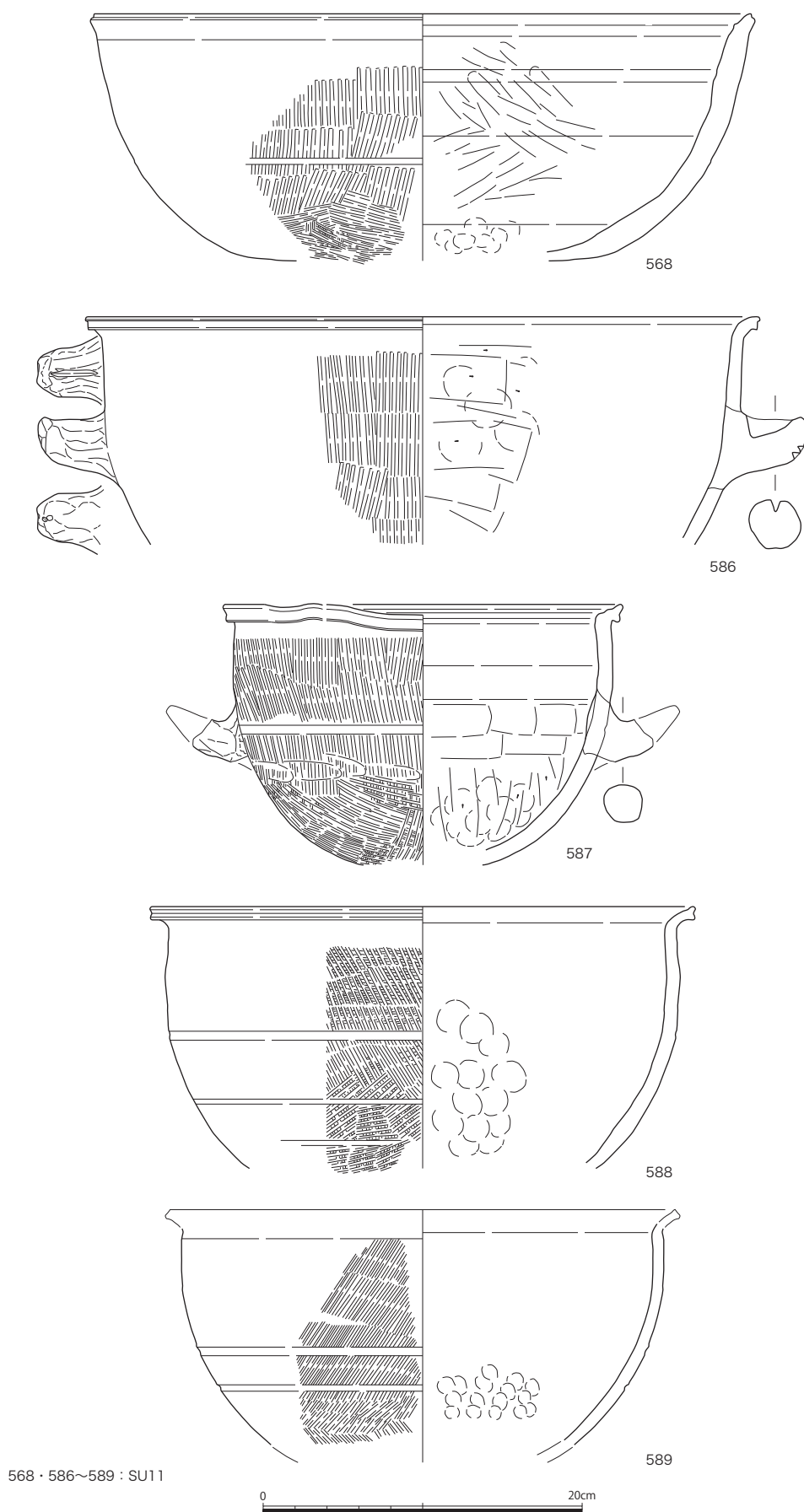


図4 志賀公園遺跡出土初期須恵器（4）

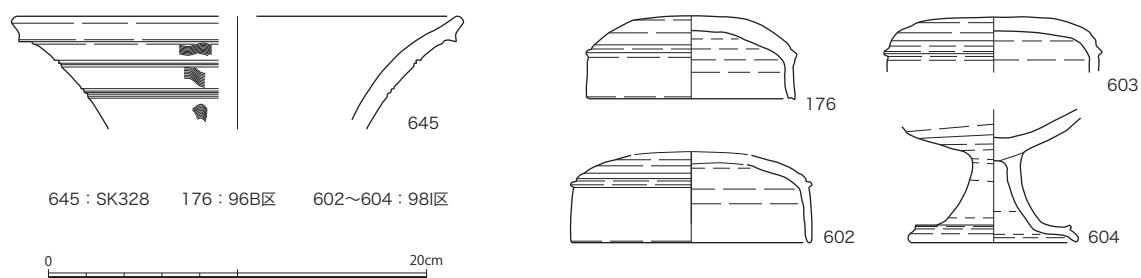
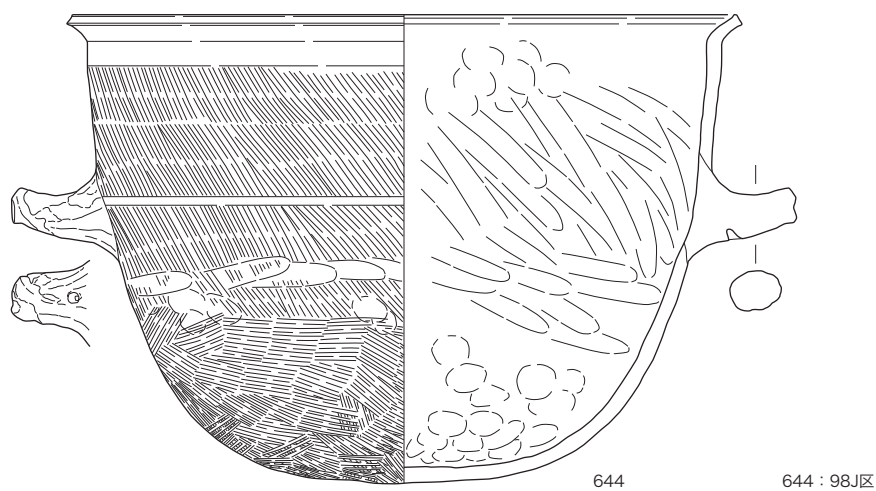
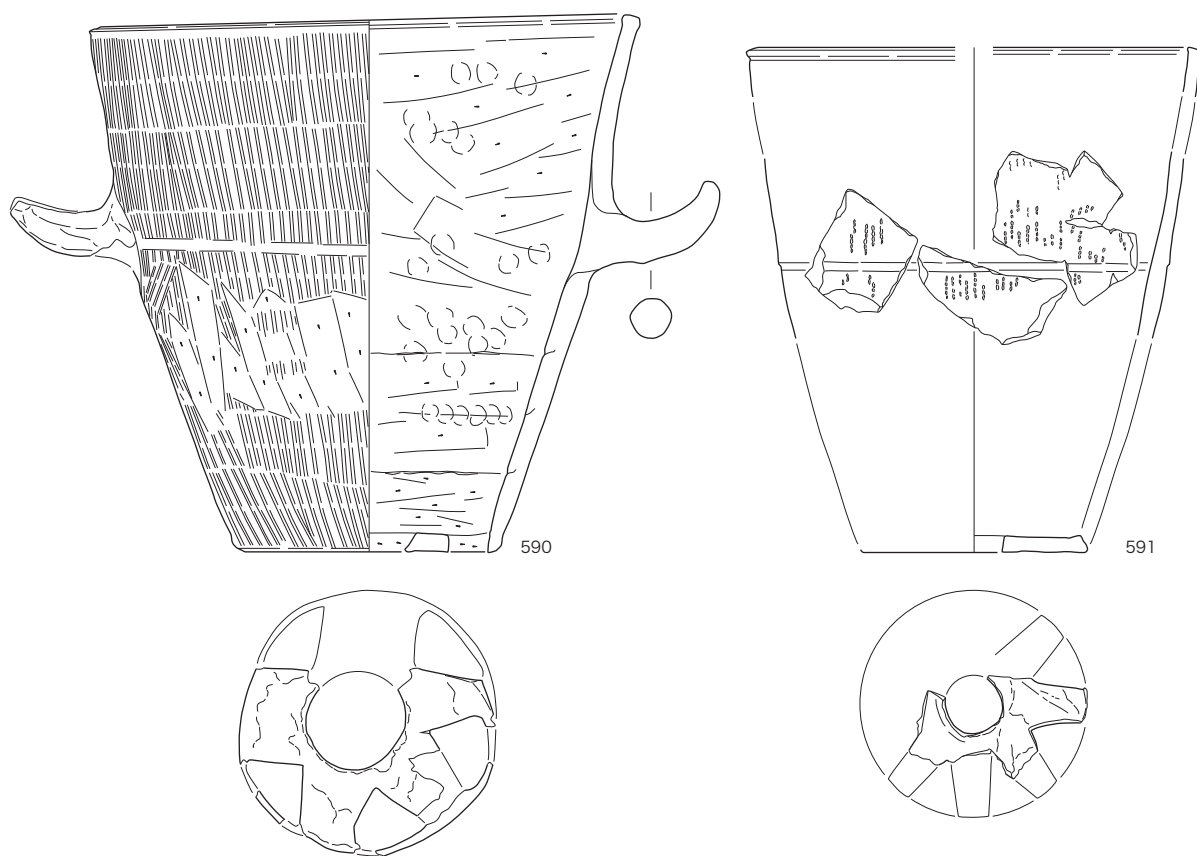


图5 志賀公園遺跡出土初期須恵器 (5)

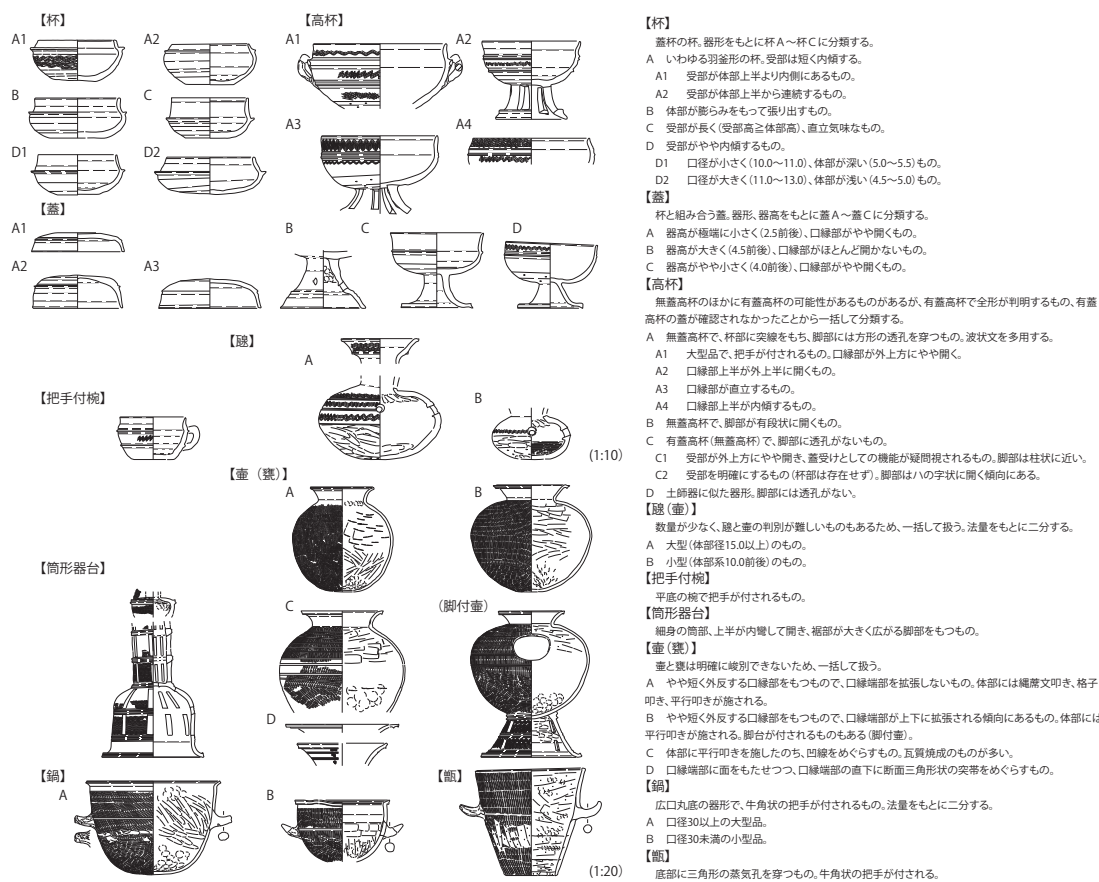


図6 志賀公園遺跡出土初期須恵器の器種分類 (早野 2001 より作成)

して、伊藤は正木町遺跡の初期須恵器に尾張における須恵器生産導入の手掛かりが存在することを早くから予見し (伊藤・小林 1991)、東山窯に先行して名古屋台地で須恵器生産が開始され、「尾張型須恵器」として定着した図式を改めて明確に打ち出したのである。

中里論文 (中里 2014・2015・2017) は、正木町 0 号住居を第 1 段階 (TG231・TG232 型式)、正木町遺跡 (北村資料)・志賀公園遺跡 (金城資料) を第 2 段階 (ON231 型式あるいは TK73 型式前後)、伊勢山中学校遺跡第 5 次調査 SK108・SK109、志賀公園遺跡 SU11、東山 111 号窯を第 3 段階 (濁り池窯あるいは TK73 型式から TK216 型式) として把握する。各段階の系譜については、第 1 段階は半島経由か陶邑窯経由のいずれかは不詳としつつも、第 2 段階は陶邑窯大野池地区との関係を重視し、第 3 段階は伊勢山中学校遺跡第 5 次調査 SK108・SK109 に大野池地区の濁り池窯との直接的関係、また志賀公園遺跡 SU11 と東山 111 号窯

に系譜の親近性、あるいは (陶邑窯高蔵寺地区からの) 新たな工人系譜の摂取を看取する。

中里は伊藤が示唆した名古屋台地における初期須恵器生産を肯定しながらも、尾張の初期須恵器には多様な工人系譜が内在することを想定し (加えて搬入品の存在も指摘)、その生産の展開には陶邑窯との関係が恒常的に維持されていたことを強調する点に大きな特徴がある。そして、多系譜の工人の組織化、資源の安定確保、窖窯焼成の埴輪生産との統合を実現した東山窯の成立を一大画期とする一歩進んだ評価を与えている。

2. 名古屋台地の土器群について

(1) 伊勢山中学校遺跡第 5 次調査 SK108・SK109

以下、伊藤論文と中里論文を対比しつつ、それらの内容を検討するが、それに先んじて志賀公園遺跡出土の初期須恵器にかかる考察 (早野 2001、以下、早野考察) 後に生じた伊勢山

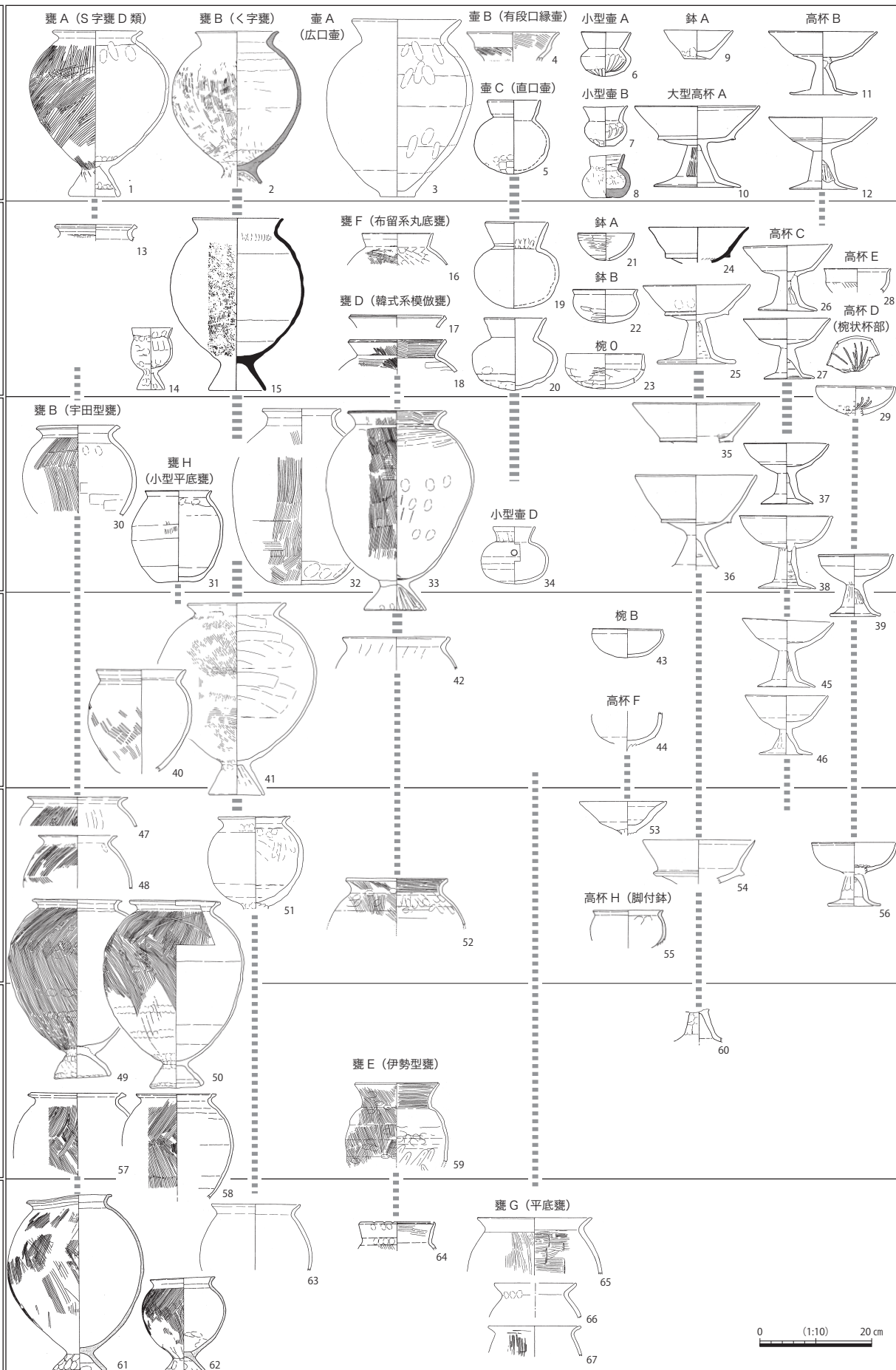


図7 古渡遺跡群を中心とした土師器の編年 (早野 2012 より)

松河戸Ⅱ式

宇田Ⅰ式

宇田Ⅱ式

(儀長式)

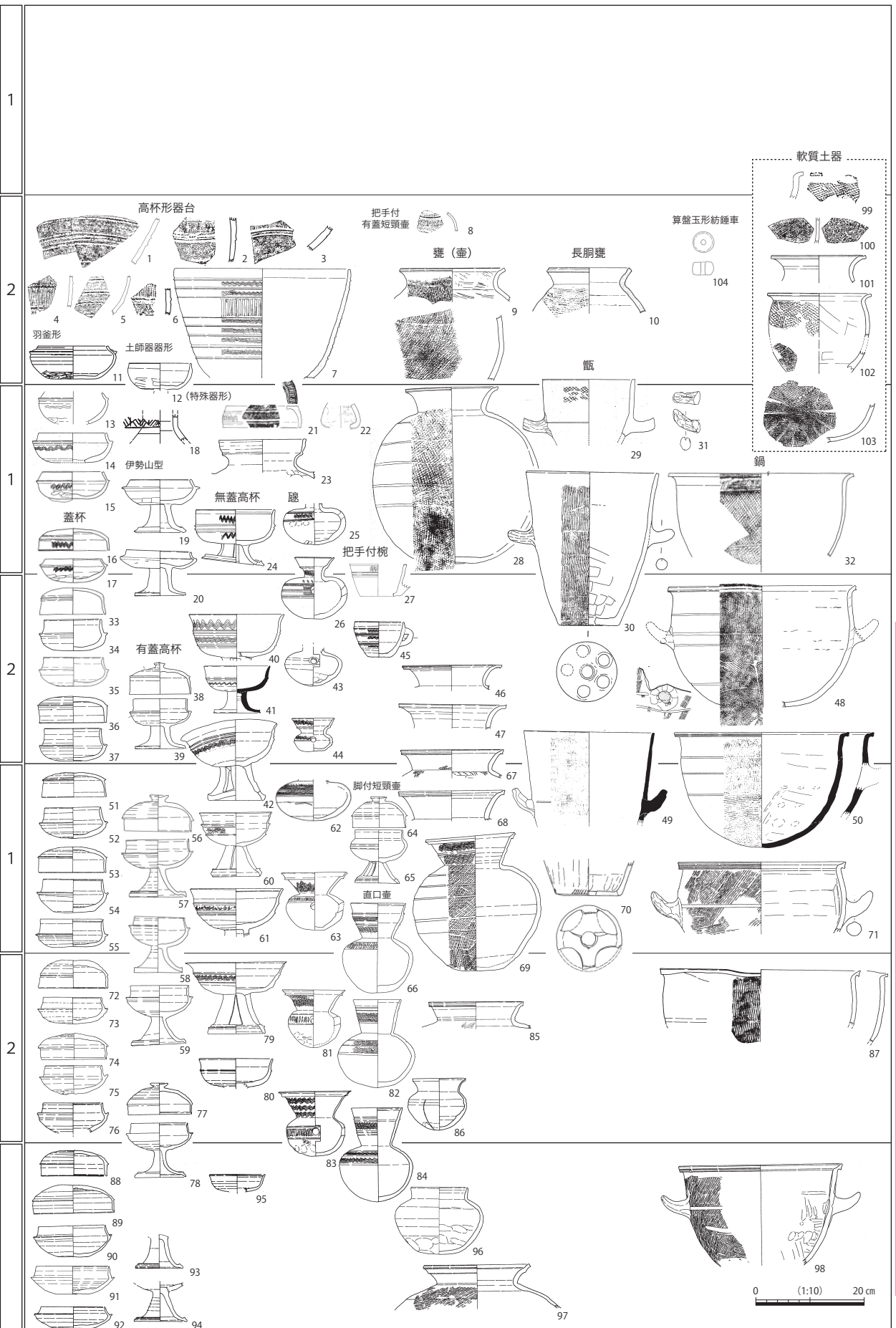


図8 古渡遺跡群を中心とした須恵器等の編年 (早野 2012 より)

表1 古渡遺跡群を中心とする標識資料と器種の消長(早野2012より)

(●: 複数個体が存在 ○: 1 個体のみ存在)

[illegible]

- | | | |
|---|---|-------------------------------------|
| 1.3.4. 堅三蔵通道跡 (イボク) SD01 | 1.2. 正木町遺跡 (第1次) | 51.53.54.55.61. 古沢町遺跡 (第3次) SB1 |
| 2.8. 伊勢山中学校遺跡 (第7次) SB14 | 3. 正木町遺跡 (第3次) | 52.67.68.71. 古沢町遺跡 (第3次) SK9 |
| 5.7.11. 伊勢山中学校遺跡 (第5次) SB27 | 4.5.27. 伊勢山中学校遺跡 (第4次) | 56.57.58.59.60.63.64.55.66.69. |
| 6.10.12. 伊勢山中学校遺跡 (第5次) SB16 | 6. 堅三蔵通道跡 (第10次) SK01 | 東古渡町遺跡 (第1次) SD03中・下層 |
| 9. 堅三蔵通道跡 (朝日航洋) SB1 | 7.10. 正木町遺跡 (伊藤 0号住居 | 62.70. 古沢町遺跡 (第3次) SK31 |
| 13.16.23.28.29. 正木町遺跡 (第21次) SK12 | 8. 正木町遺跡 (第13次) | 72.73.79. 東古渡町遺跡 (第2次) SD06 |
| 14.25. 正木町遺跡 (イボク) | 9. 正木町遺跡 (第21次) SK12 | 74.75.81.82. 東古渡町遺跡 (第1次) SD01 |
| 15.24. 正木町遺跡 (伊藤 0号住居 | 11. 正木町遺跡 (北村) | 76.80. 伊勢山中学校遺跡 (第5次) SB14 |
| 17.18.21. 伊勢山中学校遺跡 (第5次) SK14 | 12.101. 伊勢山中学校遺跡 (第5次) SK14 | 77.78.83.84.86. 東古渡町遺跡 (第3次) SD35 |
| 19.20.22.26.27. 伊勢山中学校遺跡 (第5次) SK120 | 13. 堅三蔵通道跡 (第11次) SK01 | 85. 金山北遺跡 (第2次) SB11 |
| 30.31.33.35.36.37. 伊勢山中学校遺跡 (第5次) SK108 | 14.26.29. 大須二子山古墳下層 | 87. 伊勢山中学校遺跡 (第5次) SB03 |
| 32.38. 伊勢山中学校遺跡 (第5次) SK109 | 15.16.17.19.24.30. 伊勢山中学校遺跡 (第5次) SK108 | 88.92.93.94.95. 伊勢山中学校遺跡 (第5次) SB09 |
| 34. 正木町遺跡 (第4次) SK49 | 18.31. 正木町遺跡 (第18次) | 89.90.97.98. 古沢町遺跡 (第3次) SK4 |
| 39. 伊勢山中学校遺跡 (第5次) | 20.103. 伊勢山中学校遺跡 (第8次) SK2 | 91. 堅三蔵通道跡 (朝日航洋) SB25 |
| 40.42. 伊勢山中学校遺跡 (第10次) SB01 | 21.22. 堅三蔵通道跡 (第14次) SX03・04 | 96. 古沢町遺跡 (第3次) SK34 |
| 41.44.45. 堅三蔵通道跡 (朝日航洋) SB1009 | 23. 正木町遺跡 (第4次) | 99.100. 堅三蔵通道跡 (イボク) |
| 43. 伊勢山中学校遺跡 (第5次) SB17 | 25.28. 伊勢山中学校遺跡 (第5次) SK109 | 102. 伊勢山中学校遺跡 (第8次) SK1 |
| 46. 堅三蔵通道跡 (朝日航洋) SB1006 | 32. 正木町遺跡 (第21次) SB01 | 104. 堅三蔵通道跡 (第5次) |
| 47.48.51.53.54. 堅三蔵通道跡 (朝日航洋) SB1001 | 33.34.40.46.48. 伊勢山中学校遺跡 (第10次) SB01 | |
| 49.50.52. 東古渡町遺跡 (第1次) SD03中・下層 | 35. 堅三蔵通道跡 (朝日航洋) SB1006 | 編年表掲載土器 |
| 55. 古沢町遺跡 (第3次) SK31 | 36.37. 東古渡町遺跡 (第3次) SK38 | (左列:土師器 中右列:須恵器等) |
| 56. 古沢町遺跡 (第3次) SK9 | 38.39.42.44. 東古渡町遺跡 (第2次) SD10 | |
| 57.58.60. 伊勢山中学校遺跡 (第5次) SB01 | 41.50. 金山北遺跡 (第1次) 255-SB | |
| 59. 東古渡町遺跡 (第1次) SD01 | 43.45. 伊勢山中学校遺跡 (第5次) SB30 | |
| 61.62. 古沢町遺跡 (第3次) SK43 | 47. 堅三蔵通道跡 (朝日航洋) SB1009 | |
| 63.65.66.67. 堅三蔵通道跡 (朝日航洋) SB25 | 49. 金山北遺跡 (第1次) 165-SK | |

編年表掲載土器
(左列：土師器 中右列：須恵器等)

中学校遺跡第5次調査SK108・SK109にかかる認識の変更について述べる。この変更は、古墳時代集落としての名古屋市中区古渡遺跡群を検討する際に提示した編年(図7・8、表1)にも反映されているが(編年上における宇田Ⅰ式2段階から同1段階への繰り上げ)、主たる検討の対象が集落としての古渡遺跡群であったこともあって、その詳細は触れていない(早野2012)。

早野考察においては、志賀公園遺跡SU11と東山111号窯との編年上の位置関係について、羽釜形態の杯(525・526)の存否等から、前者が後者に対して先行する可能性を考慮しつつも、同段階として理解した。ただし、無蓋高杯の透孔については、前者が4方から8方で5方が圧倒的に多く(544～547・549・554・555)、後者は7方から9・10方で、後者が多い傾向にある。ただ、最近、大西遼は東山111号窯における4方透孔の無蓋高杯の存在を指摘している(大西2017)。志賀公園遺跡SU11と伊勢山中学校遺跡第5次調査SK108・SK109との関係については、格子叩きの甕(図8-28)等から、後者が前者に先行する可能性を考慮しつつも、前者には羽釜形態の杯が組成すること等をも勘案し、やはり同段階として理解した。

しかし、伊勢山中学校遺跡第5次調査SK108・SK109は杯類として、「伊勢山型」ともした(伊藤や中里は有蓋とする)特徴的な高杯(図8-19)、無蓋高杯(同24)が明らかに優勢であることに対して、志賀公園遺跡SU11は蓋杯が安定して組成することを重視すれば、伊勢山中学校遺跡第5次調査SK108・SK109が志賀公園遺跡SU11に対して先行する可能性が高いと考えられる。加えて、伊勢山中学校遺跡第5次調査SK108の「韓式系模倣甕」(図7-33)とした土師器甕(口縁部の強いヨコナデ)に、より韓式系土器長胴甕との近似性が認められる点もそれを傍証するものと判断した。つまり、この認識の変更によって、TK73型式―(東山111号窯期以前)―宇田Ⅰ式1段階―伊勢山中学校第5次調査SK108・109、TK216型式―東山111号窯期―宇田Ⅰ式2段階―志賀公園遺跡SU11とする編年上の位置と併行関係が示され、伊藤が示した理解とも概ね一致する

ことになる。ただし、伊勢山中学校遺跡第5次調査SK108・SK109の無蓋高杯は4方透孔を含むこと、鍋・甕(図8-30)は志賀公園遺跡SU11の鍋(586)に認められる把手への細工(溝の切り込み、刺突孔)が認められない(須恵器鍋・甕として定着した感がある)こと等、志賀公園遺跡SU11に対して後出する様相も看取されることにも注意する必要がある。

一方、中里論文においては、杯の波状文や静止ヘラケズリの有無、伊藤のいう「椀状高杯」(図8-12)、腿等の個別器種の対比、土師器編年の精度から単純に新古を判断することは難しいとして、伊勢山中学校遺跡第5次調査SK108・SK109と志賀公園遺跡SU11の両者に工人系譜の差異を読み取ろうとしている。また、無蓋高杯について、前者の直立気味の口縁部を古相、後者の外反する口縁部を新相とするが、やはり、工人差の可能性をも考慮している。

(2) 伊勢山中学校遺跡第8次調査SK1・SK2等

伊藤論文は、韓式系軟質土器が伴う伊勢山中学校遺跡第8次調査SK1と同SK2の両者を「TK73型式並行」とするが、前者は須恵器が甕の破片のみである一方、後者は広口壺と複数形式の高杯(図8-20等)が伴うこと、土師器の様相差から前者をTG231・232型式併行(松河戸Ⅱ式2段階)、後者をTK73型式併行(宇田Ⅰ式1段階)として理解している(早野2004・2012)。それ以外の名古屋台地の資料について、伊藤論文に示されている編年上の理解に大きな異論はない。

3. 志賀公園遺跡の土器群について

(1) 志賀公園遺跡SU13・SU14

早野考察と伊藤論文において、大きく異なっているのが、志賀公園遺跡SU13、同SU14に対する理解である。同SU11を含めたこれらは、早野考察において分析の対象とした土器集積で、SU13―松河戸Ⅱ式2段階(TG231・232型式併行)→SU14―宇田Ⅰ式1段階(TK73型式併行)→SU11―宇田Ⅰ式2段階(東山111号窯期／TK216型式併行)とする推移を想定した。なお、SU11は先述のように東山111号窯期／TK216型式併行の須恵器の器種

(525～591) が豊富に伴う一方、SU13 には縄蓆叩きの甕 1 個体 (177) のみ、SU14 には脚部が有段状で、菱形の透孔を穿つ無蓋高杯 (305) と 2 本 1 単位の平行沈線 (二子線) を施した器種不明の小破片 (306) のみに伴う。

伊藤は志賀公園遺跡 SU13 の縄蓆叩きの甕 (177) と松河戸Ⅱ式 2 段階 (TG231・TG232 型式併行) の正木町遺跡 0 号住居の縄蓆叩きの甕を比較して、後者は「厚手で瓦質を呈するが」、前者は「薄手で厚みは半減しており、須恵器になりきっている。その間には大きな差がある」とするが、両者は法量そのものが大きく異なっている。対して中里は、口縁部先端の内面の窪み、体部の凹線と無文当て具の使用は TK73 型式以降の陶邑窯の甕に認められないことから、「初期の段階から在地生産された可能性」を想定している。併せて甕の特徴について、正木町遺跡 0 号住居・志賀公園遺跡 SU13—縄蓆叩き・格子叩き、伊勢山中学校遺跡第 5 次調査 SK109—格子叩き・凹線、東山 111 号窯と志賀公園遺跡 SU11—平行叩き・凹線として把握するが、上の様相差を段階的な変遷とするか、多様な要素の共存とするかについては判断を保留しているようである。あるいは前二者を名古屋台地の生産窯、後者を東山窯の要素とする理解も示しているようである。なお、志賀公園遺跡 SU13 の縄蓆叩きの甕については、成正鏞より大阪府豊中市利倉西遺跡の百済土器の可能性が高いとされる甕 (図 9) に類似すると の教示があった。

また、SU14 の無蓋高杯 (305) について伊藤は、TK216 型式に比定される形態が類似す

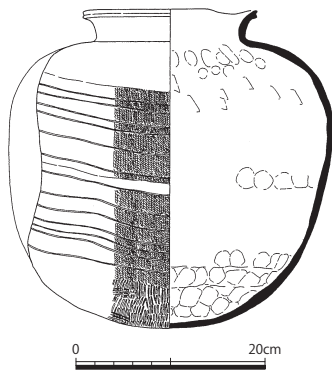


図 9 利倉西遺跡の縄蓆叩きの甕*

* 豊中市 2005『新修豊中市史 第 4 巻 考古』より

る個体の例を挙げているが、それをもって、TK216 型式に限定することは可能であろうか。須恵器の形態比較をより重視し、土師器の様相差を時期差としてではなく、同時期における使用状況の差として理解することも不可能ではないかもしれないが、SU13 は縄蓆叩きの甕のみ、SU14 は無蓋高杯のみに伴う須恵器の組成状況は、前者が器台と甕のみで杯類を伴わない正木町遺跡 0 号住居、後者が無蓋高杯が優勢な伊勢山中学校遺跡第 5 次調査 SK108・SK109 に対応し、むしろ伊藤による尾張型須恵器の第 1 段階と第 2 段階にそれぞれ対応しているようにも思われる (ただし、土師器の様相差から SU11 と同段階の宇田Ⅰ式 2 段階として理解した SU10 と SU12 北西群に伴う須恵器はごく少ない)。

伊藤は尾張地域一帯における初期須恵器の分布にも触れ、「TK216 型式並行」以前と思われる初期須恵器は名古屋台地を除くと稲沢市寺脇 (大矢) 遺跡*、志賀公園遺跡でまとまって出土している程度で、「TK73 型式並行」以前となると、名古屋台地以外はその周辺を含めてもごく限定的であることを述べている。この様態をも踏まえ、伊藤は TG231・232 型式から TK73 型式併行の段階 (伊藤による尾張型須恵器第 1・2 段階) の須恵器の生産拠点を名古屋台地に求めているのであろう。志賀公園遺跡 SU13、同 SU14 の編年上の位置に対する理解の差はこの評価とも無関係ではない。改めて志賀公園遺跡の土器集積の形成状況と土師器編年の再点検、精査も必要であろうが、志賀公園遺跡 SU13、同 SU14 の編年上の位置について、早野考察における認識を追従したとしても、相伴する須恵器はごく少なく、他地域の生産窯、あるいは伊藤が想定する名古屋台地の生産拠点から供給された可能性も十分に想定されるように思われる。

(2) 志賀公園遺跡 SU11

志賀公園遺跡 SU11 は他の土器集積と比較して、遺物の分布は明らかに散漫で、扱いには注

* 名古屋市博物館が所蔵する「大矢遺跡」の資料は「寺脇遺跡」として紹介されていたが (稲沢市 1984『新修稲沢市史 資料編六 考古』)、その採集地点から正しくは「大矢遺跡」であることが判明している (瀬川貴文 2004『名古屋市博物館研究紀要』第 27 巻 名古屋市博物館)。

意を要することは確かである。全体の検出状況も不安定で、遺構の理解には釈然としない部分も多い。これらを踏まえ、早野考察においては可能な限り詳細に須恵器の接合状況を提示し、原則として一括資料に準じた扱いをしている。

対して、中里論文は蓋杯の詳細な検討を踏まえて、SU11 の一括資料としての扱いに疑問を呈している。ただ、中里は「口縁端部と形状の小型化からより新しい要素を持つ杯身もある」こと、あるいは SU11 の蓋杯に東山 11 号窯の蓋杯と類似する個体が混在することを指摘するが、前者は後者に比して、全体に器壁は厚く、鋭利さにも乏しいような印象も受ける。いずれにせよ、特定の型式の比較のみから一括資料としての厳密性を吟味することは難しい。他器種の詳細な分析による検証が必要であろう。また、伊藤、中里とも SU11 の蓋杯で、丸底で法量が多い個体 (535) を「搬入品」としている。

(3) 羽釜形態の杯の問題

伊藤論文においては、「尾張型杯・高杯」の成立を把握するに際して、羽釜形態の杯を含む初現期の杯を系統区分し、それぞれの変遷を検討している。その際、赤塚次郎 (赤塚・早野 2001) が示した「尾張型須恵器の編年」を参照し、「杯の変遷は正しく把握され」ず、「変遷の方向は逆になっている」とする (図 10)。

早野考察においても、赤塚の理解を踏まえつつ、志賀公園遺跡 SU11 において重厚な羽釜形杯と薄手の羽釜形杯の両者が共伴していることを重視し、それぞれ、志賀公園遺跡 (金城資料)、正木町遺跡 (北村資料) からの系譜を想定した。なお、前者は口縁部を「折り込み」気味に成形し、後者は体部下半に膨らみを持たせて口縁部先端までを曲線的に連続して成形する特徴が認められ、型式変化の方向性として、体部が浅くなる傾向を想定した。この想定により、伊勢山中学校遺跡第 5 次調査 SK108 の杯を羽釜形杯から脱却した蓋杯の初源的な形態として理解したのである。しかし、形式的に先行すると想定した志賀公園遺跡 (金城資料)、正木町遺跡 (北村資料) は、いずれも採集資料で、編年上の位置を確定することは難しく、前述したように、伊勢山中学校遺跡第 5 次調査 SK108・SK109 は志賀公園遺跡 SU11 に対して段階的に先行す

る可能性もあるので、系譜、編年上の位置の理解については、検討の余地が大きい。

さて、伊藤は尾張型杯を「尾張型杯 A」、「土釜形」の「尾張型杯 B」、平底の「尾張型杯 C」等に大別している。伊藤が「尾張型杯 A」で模式的に最も先行する個体として例示しているのが、伊勢山中学校遺跡第 5 次調査 SK108 の杯である。ただ、この杯について伊藤は、「丸底という点で尾張では稀な資料で、濁り池 C-1 などに共通する」としつつ、それは直接には結びつかず、「強いて」としながら大阪府茨木市総持寺 10 号墳の蓋杯を比較対象として例示し、中久保辰夫も文様の割り付け (体部文様帯下端を突線で区画しない) が尾張の杯と類似することを指摘する (中久保 2017)。ただし、総持寺 10 号墳の杯は全体に扁平で、類似の程度に対する評価は難しい。中里も濁り池窯の杯との形態上の類似について、伊藤の指摘を追認しつつ、波状文の有無に差異が表出することを指摘

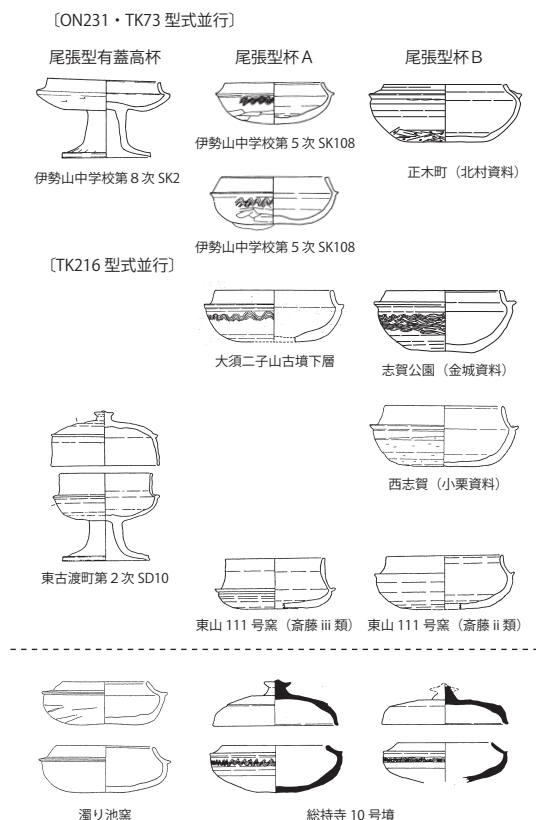


図 10 伊藤による羽釜形態の杯の変遷と関連資料*

* 伊藤 2004、信太山遺跡調査団濁り池窯址班 1994『濁り池須恵器窯址』、大阪府教育委員会 2005『総持寺遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告 2004—2 より作成

する一方、丸底を理由に最古とする伊藤の見解には疑問を呈している。

対して中里は羽釜形態の杯について、正木町遺跡（北村資料）、志賀公園遺跡（金城資料）の杯を（TG231・232 型式新相とする）ON231 号窯の杯に対比可能として、陶邑窯大野池地区から技術がもたらされたとすると同時に、志賀公園遺跡（金城資料）の杯の波状文施文に在地化の様相を看取する。そして、次段階には名古屋市中区大須二子山古墳下層の杯のように在地化が進む一方、改めて（TK73 型式古相とする）大野池地区の濁り池窯に近い工人が受け部の折り込み技法、丸底の底部をもたらしたとする。この見解は、陶邑窯大野池地区との継続的な技術交流を想定する中里の重要な論点ともなっている。

これに関連して、伊藤が淀川流域との関連をも視野に入れつつ例示した総持寺 10 号墳の蓋杯についても中里は陶邑窯大野池地区との類似を指摘するが、系譜関係については、〈中里 A 案〉大野池地区→淀川流域（総持寺 10 号墳）→尾張（伊勢山中学校遺跡）、〈中里 B 案〉大野池地区→淀川流域（総持寺 10 号墳）・尾張（伊勢山中学校遺跡）のいずれか（後二者が“親子”関係か“兄弟”関係か）は、現状においてもなお、判断が難しいとするが、いずれにせよこれらの図式は陶邑窯よりも淀川流域との系譜関係を重視する伊藤の見解とは異なっている。

また伊藤は、「ON231・TK73 型式並行」の伊勢山中学校遺跡第 5 次調査 SK108 の杯が「TK216 型式並行」の大須二子山古墳下層の杯を経て（この段階をもって波状文が消失し）、東山 111 号窯の斎藤孝正の分類による iii 類（斎藤 1983）、つまり、口縁部の立ち上がりが著しく高い杯が成立するという。しかし、東山 111 号窯期が TK216 型式併行とすると、大須二子山古墳下層の杯は東山 111 号窯の杯 iii 類とほぼ同時期と考えられることになるが、両者の形態の隔たりはなお大きい。なお、中里は東山 111 号窯の蓋杯 iii 類が「内的要因で生まれたとすることにも無理がある」とする。

（4）その他

伊藤論文では、早野考察における器種分類を詳細に検討し、幾つかの誤りを指摘している。

例えば、早野考察において「高杯形器台」とした鉢状の個体（568）は「鍋」であるとして、現状において志賀公園遺跡に高杯形器台は存在しないとしている。ここで、その指摘を受け入れ、「高杯形器台」とした器種分類を訂正する。なお、同様の器形は下原窯において確認され、「鉢類」として分類されている。さらに、SU11 出土の「無蓋高杯 A1」とした器種（543）は「台付鉢」または「脚付鉢」とする。中久保辰夫は同様の器種を「把手付碗形高杯」と呼称し、北河内固有であることを指摘する（中久保 2017）。なお、伊藤、中里は伊勢山中学校遺跡や志賀公園遺跡で出土する無蓋高杯には把手を付さない特徴があることを指摘し、中里は把手を付す SU11 の「台付（脚付）鉢」を稀有な存在と指摘する。

4. 綿神社遺跡の円窓付壺について

志賀公園遺跡の初期須恵器の一群でも異彩を放つのが、体部上位に焼成前の円窓を穿つ脚付壺である。類似する円窓付壺が志賀公園遺跡南東約 0.5km に所在する綿神社遺跡において出土していることは特に注目される。綿神社遺跡の円窓付壺（金城文化財保護委員会蔵・名古屋市博物館寄託）については、その特異さから注目されることも多いが（吉田 1938、愛知県陶磁資料館 1982、瀬川 2008 等）、以前、簡単に触れたのみであるので（早野 2005）、ここで改めて実測図を提示し、資料の詳細を述べておきたい（図 11）。

綿神社遺跡の円窓付壺は昭和 7 年（1932）、綿神社裏修築工事中に発見された。口径 16.8cm、器高 28.0cm、体部最大径 28.8cm で、体部のやや上位に長径 10.2cm、短径 9.4cm の楕円形の窓を焼成前に穿つ。体部全面には平行叩きを施し、断続的な沈線を巡らす。なお、底部周囲はよく磨耗し、脚が脱落した痕跡も認められないことから、志賀公園遺跡の脚付壺とは異なり、脚は付されていなかったようである。

綿神社遺跡以外に加えて、円窓付甕は濁り池窯、堺市陶器・小角田遺跡 SK163（焼成前穿孔？）、春日井市下原窯における出土が知られている（図 12）。中里が名古屋台地と志賀公園

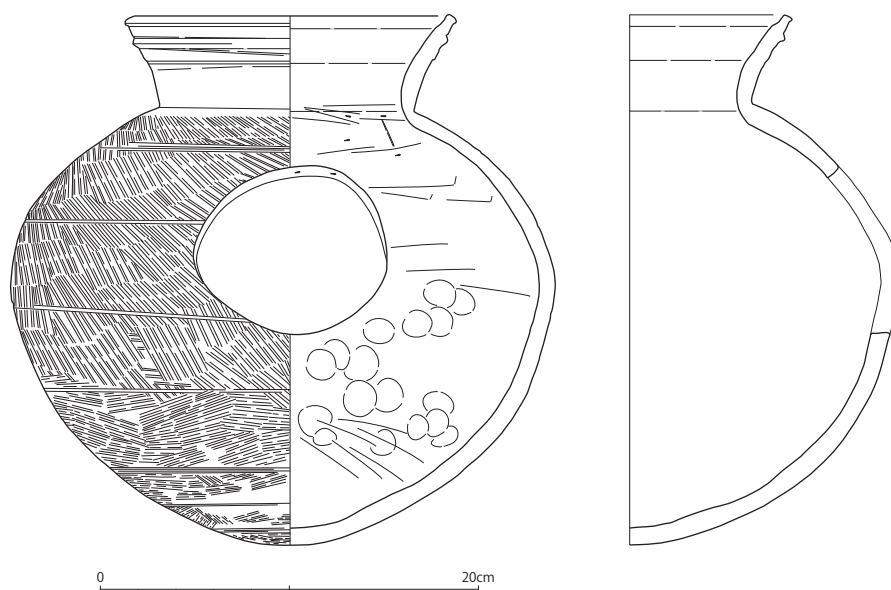


図 11 綿神社遺跡の円窓付壺

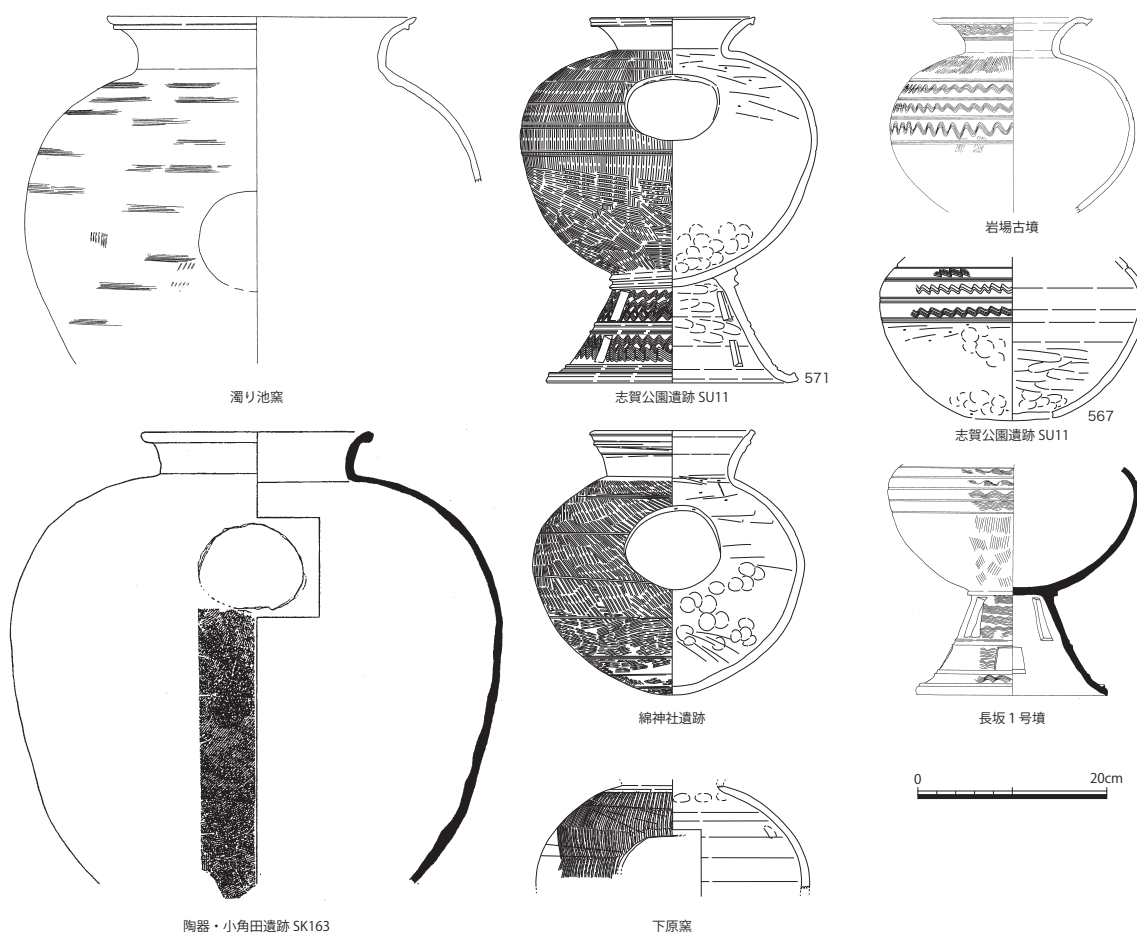


図 12 円窓付壺（脚付壺）とその関連資料*

* 信太山遺跡調査団濁り池窯址班 1994『濁り池須恵器窯址』、堺市教育委員会 1988『陶器・小角田遺跡Ⅱ』、春日井市教育委員会 2006『下原古窯跡群』春日井市遺跡発掘調査報告第12集、鈴木敏則 1994『岩場古墳の鉄製品』『ホリデー考古』第10号 ホリデー考古刊行会、尾張旭市教育委員会 1977『印場大塚古墳』尾張旭市誌考古資料編第1集より

遺跡の初期須恵器の系譜の理解において濁り池窯を含めた陶呂窯大野池地区を重視していることは前述の通りである。また、下原窯の壺・甕類に、綿神社遺跡の円窓付壺に類似した口縁部の形状の個体も見受けられることをも勘案すると、綿神社遺跡の円窓付壺は東山11号窯期以降に帰属する可能性が高い。

なお、脚付壺としては尾張旭市長坂1号墳の個体が類似する。長坂古墳群は6基の小円墳から構成される古墳群で、長坂1号墳は共伴する埴輪、須恵器から城山2号窯期から東山11号窯期の築造と推定される。長坂1号墳の壺は体部中位付近に沈線による区画帯に波状文を施文し、2本1単位の平行沈線（二子線）による文様区画内に波状文を施文する志賀公園遺跡SU11（567）、西尾市岩場古墳の壺と文様構成を同じくする。岩場古墳はTK216型式、東山111号窯期の築造である。

おわりに

以上、志賀公園遺跡と名古屋台地の初期須恵

器にかかる論点をやや詳細に抽出し、若干の関連する資料も提示した。結果、その資料の価値は今日的にも非常に高いことが改めて認識された。それはひとえに伊藤や中里らが報告された資料に鋭い視座、観察眼を向けたことに尽きる。しかし今回は、土器の報告に携わった責任の一端を果たしたのみで、議論の前提となる遺跡、資料の検出状況に対する検討は決して十分ではない。発掘調査の検証は相当の困難も予測されるが、機会を改めて試みることにしたい。

志賀公園遺跡の報告書から本論の作成は、赤塚次郎、伊藤禎樹、中里信之各氏との接点を契機としている。また、一昨年から共同で当地域の須恵器を研究している大西遼、尾崎綾亮、中久保辰夫各氏からも多くの示唆を受けている。

資料調査に際しては、浅田博造（春日井市教育委員会）、大塚友恵（特定非営利活動法人古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク）、瀬川貴文・岡村弘子（名古屋市博物館）、松井伸伍（金城文化財保護委員会）各氏からのご高配があった。末尾ながら、記して深謝したい。

参考文献

- 赤塚次郎・早野浩二 2001「松河戸・宇田様式の再編」『研究紀要』第2号 財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
- 愛知県陶磁資料館 1982『須恵器展』
- 伊藤禎樹 2004「尾張型須恵器の出現」『韓式系土器研究』VIII 韓式系土器研究会
- 伊藤禎樹・小林義孝 1991「尾張正木町遺跡出土の初期須恵器」『韓式系土器研究』III 韓式系土器研究会
- 岩崎直也 1987「尾張型須恵器の提唱」『信濃』第39巻第4号 信濃史学会
- 大西 遼 2017「窯跡資料から見た東山窯開窯期の再検討」『考古学フォーラム』23 考古学フォーラム
- 尾野善裕 1997「尾張・西三河（窯跡）猿投・尾北・その他」『古代の土器5-1 7世紀の土器』古代の土器研究会
- 斎藤孝正 1983「猿投窯成立期の様相」『名古屋大学文学部研究論集』LXXXVI（史学29）名古屋大学文学部
- 斎藤孝正 1984「東海地方」『日本陶磁の源流—須恵器出現の謎を探る—』柏書房
- 城ヶ谷和広 2007「愛知県下における須恵器生産と流通」『研究紀要』第8号 財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
- 瀬川貴文 2008「古墳時代の重要資料」『新修名古屋市史 資料編 考古1』名古屋市長
- 中久保辰夫 2017「初期須恵器の地域色と技術移動に関するノート」『考古学フォーラム』23 考古学フォーラム
- 中里信之 2014「名古屋台地とその周辺における初期須恵器の検討」『韓式系土器研究』XIII 韓式系土器研究会
- 中里信之 2015「須恵器の成立と東山窯」『韓式系土器研究』XIV 韓式系土器研究会
- 中里信之 2017「須恵器と東山窯成立研究の現状と展望」『考古学フォーラム』23 考古学フォーラム
- 早野浩二 2001「志賀公園遺跡における古墳時代中期の土器について」『志賀公園遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第90集 財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
- 早野浩二 2004「濃尾の韓式系土器」『かにかくに』八賀晋先生古稀記念論文集刊行会
- 早野浩二 2005「ミヤケの地域的展開と渡来人—東海地方における朝鮮半島系土器の考察から—」『考古学フォーラム』17 考古学フォーラム
- 早野浩二 2012「尾張「古渡遺跡群」の形成過程とその構造」『前期古墳の変化と画期 古墳時代集落研究の再検討』考古学研究会例会シンポジウム記録8
- 吉田富夫 1938「所謂円窓附土器及び其の新例に就いて」『考古学』第9巻第8号 東京考古学会